営業報告書文化の日米韓比較

全　在　紋（チョン　ジェ　ムン）
崔　震　賢（チェ　チン　ヒョン）

Ⅰ　は　じ　め　に

本稿に言う「文化」とは，ビジネスマン（ビジネスウーマンをも含む；以下同じ）をはじめ，人間集団が共有する価値観・行動様式を指す。はじめに，「文化」をこのように定義しておく。これは，言語学，人類学において今や常識となっている定義でもある[1)]。

およそ，コトバの意味（概念）を明確に捕捉するためには，そのコトバの対立語と対比してみるのが早道である。たとえば，「男」というコトバの意味は，対立語である「女」というコトバの意味と対比して考えると分かりやすい。

「文化」に対比されるべき対立語はと言えば，「自然」である。山内によれば，近代西洋の文化（culture）という言葉は，もともとラテン語の耕す（colere）からきている。つまり，原野を開墾し，森林を伐採して自然（nature）を改変，支配するという意味からきている[2)]。

池上も，文化とは「自然」に人間が手を加えて創り出したもの，と論定し

1）文化と価値観および行動様式との関連については，以下を参照せよ。
丸山圭三郎，『生の円環運動』，紀伊國屋書店，1992年，135〜136ページ，149ページ。
鈴木孝夫，『ことばと文化』，岩波書店，1973年，ⅰページ。
2）山内昶，『タブーの謎を解く――食と生の文化学』，筑摩書房，1996年，17ページ。

キーワード：会計言語，意味，ソシュール，営業報告書，縮み志向

ている[3]。この見方は，「自然」を「発見する構造」とし，「文化」を「創り出す構造」とする議論に通じている[4]。換言すれば，自然を仮に神（存在するとして）の所産とするのであれば，文化は神に対比される人間の所産になるものと言えよう。

会計は企業の言語（the language of business）と言われる。日本人は日本語でコミュニケートする。アメリカ人は英語でコミュニケートする。それと同じように，ビジネスマンは会計でコミュニケートする，という類推である。

会計が言語であるとは，ビジネスマンの間で会計言語の「意味」が共有されているからである。たとえば，「（借）現金　100万円／（貸）資本金　100万円」という仕訳（センテンス）の意味が，複式簿記（企業の言語の文法）に通じたビジネスマンの間で周知・了解されているからである。

企業において営まれる会計は，決算を経て最終的には財務諸表（テクスト＝センテンスの集合）となって結実する。その財務諸表は営業報告書の基礎をなす。本稿は，営業報告書から看取される企業文化の国際比較を試みんとするものである。

およそ，人間の「認識」は「比較」に始まる。たとえば，「日本的経営」（日本に固有の経営）なるものは，日本の企業経営だけを見ていては分からない。日本の企業経営について，いかに長期にわたり，いかに多くの事例に接したとしても，分からない。分かるはずもない。アメリカの企業経営，あるいは他のアジア諸国の企業経営と「比較」してみて，はじめて企業経営における「日本的なるもの」も明らかとなる。

企業文化の国際比較について言えば，アメリカと日本，あるいはアメリカと韓国といった2者間比較は，これまでにも散見された。本稿では，日本・韓国・アメリカの3者間比較を企図する。知見の蓄積において，2者間比較が相乗的効果を有するとすれば，3者間比較は累乗的効果を有しえよう。こ

3）池上嘉彦，『記号論への招待』，岩波書店，1984年，22ページ。
4）丸山圭三郎，『ソシュールの思想』，岩波書店，1981年，291〜292ページ。

こに，われわれの狙いがある。

ただし，本稿における比較の対象は，各国をそれぞれ代表するリーディング・カンパニー，すなわち，上場企業のような大企業のケースを前提としている。中小企業や零細企業は，さし当り想定の外に置く。このことを，あらかじめお断りしておきたい。中小・零細企業のケースでは，日米韓における企業経営の相異が読み取りにくいからである。かかる相異は，大企業のケースにおいて顕著なためである。

本稿は，営業報告書文化を国際比較するにあたり，フェルディナン・ド・ソシュールの言語理論を援用する。現代哲学の一大潮流をなす構造主義は，ソシュール言語学を淵源とする。ドイツの哲学者として高名なカッシーラー（Ernst Cassirer）によっても，ソシュール言語学こそは，17世紀ガリレイの地動説に比肩するとまで評されている[5)]。

Ⅱ　言語観の 2 類型

「コトバ」（ひろく「記号」）とは何か。一言で言うなら，「意味をもつもの」である。逆に言うと，意味をもたなければ，それはコトバではない，ということになる。この理解については，言語学界でも異論は見あたらない。何らかの意味をもちさえすればコトバであるから，言語学界におけるコトバは，音声・文字に限定されない。『格好よい』とか『地味』だとかいう意味（イメージ）をもてば，「服装」（ファッション）などもコトバと見られる[6)]。

「服装」までが意味をもつゆえコトバであるなら，一体，われわれの周囲に意味をもたない事物・現象などあるのだろうか。すなわち，コトバでない事物・現象など存在するのであろうか。実は，「意味」のとり方しだいで，

5）Ernst A. Cassirer, “Stracturalism in modern linguistics,” *Word N.1,* 99〜120ページ。本引用は，次著から転載した。
김성도,『로고스에서 뮈토스까지—소쉬르 사상의 새로운 지평—』, 한길사, 1999년, 116〜117페이지.

6）以下，対比的な語法において，一重鉤括弧（「　」）は〈コトバ（記号）〉を指すものとし，二重鉤括弧（『　』）はコトバ（記号）の〈意味〉を指すものとする。

コトバでない事物・現象はなかなか見出しがたいのである。そう，現代の言語学界では，われわれの住む世界はコトバだらけ，コトバまみれの世界と見られている[7)]。

コトバとは「意味をもつもの」である。このことに異論はないにしても，では，その「意味」とは何か。つまり，「意味の意味」（the meaning of meaning）についてはどうか。問題はこれである！　実際のところ，この点になると，言語学界でもいまだ諸説乱立の気味である。諸説を2大別すると，〈意味実体論〉と〈意味関係論〉とに整理されうる。前者は意味を実体（entity）と見る説であり，後者は意味を関係（relation）と見る説である。

意味実体論は，コトバとコトバの意味をなす対象とは「一対一の対応」（one-to-one correspondence）をなすとする見方である。コトバとは，『机』とか『椅子』とか『黒板』とか，それら自存的な対象（実体）にあてがわれた名前（ラベル）だと見る説である。通説をなす。それは常識的な言語観である。意識すると否とにかかわらず，古今東西，圧倒的多数の人びとにより前提されてきた見方である。今日においても，蔓延している見方である。

くわしくは少しあとで解説するが，意味関係論は，コトバの意味を同一言語体系内における他のすべてのコトバとの関係と見る。ソシュールに始まる構造主義者たちの言語観である。

2つの言語観のうち，意味実体論に対する反証は，いともたやすい。各国・各民族間における類義語や時制（tense）などを国際比較すれば明らかである。人間のコトバ（言語＝シンボル）は，もともと一対一の対応でできているものではない。そのことが立ちどころに判明する。

たとえば，日本人や韓国人は『蝶』と『蛾』を区別するが，フランス人には区別がつかない。日本語や韓国語でいう『蝶』も『蛾』も，彼の地では「papillon」一語で括られてしまっているからである。日本人や韓国人の子供たちは，『蝶』を見たら〈追いかける〉。『蛾』を見たら〈追い払う〉。対照

7）丸山圭三郎，『生命と過剰』，河出書房新社，1987年，70ページ。

的な反応を見せる。コトバの意味の，区別あってこその反応の違いである。他方，フランス人は『蝶』と『蛾』に対し，同じように反応する。反応に違いは起きない。両者は同一物と見られているからである。

また，フランス人は『犬』と『狸』の区別もかなわない。両者に対し，フランス語は「chien」一語しか持たないからである。

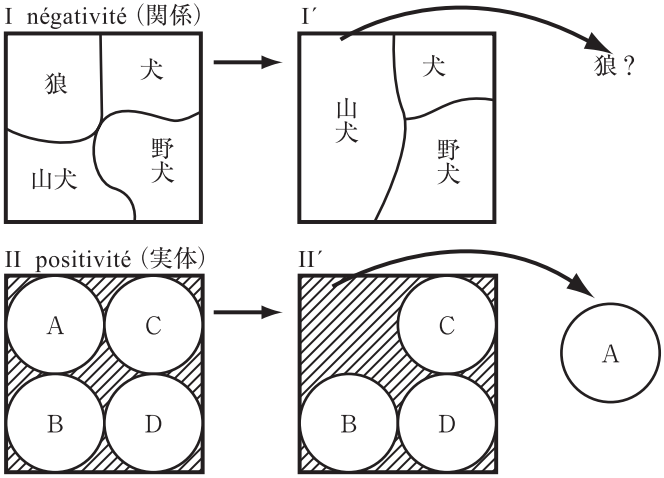
この 2 例だけ見ると，言語体系としては，全体的に日本語・韓国語は肌理（きめ）が細かく，フランス語は逆に粗いように見えるかもしれない。しかし，それは一面的な浅慮にすぎない。時制の点でなら，英語・フランス語の方が日本語・韓国語よりきめ細かい。たとえば，日本語・韓国語には，英語にいう現在完了形はない。

また，日本語・韓国語に過去形は一つだけであるが，フランス語は複合過去形（瞬間的事象の過去形）と半過去形（継続的・反復的事象の過去形）とを峻別する。たとえば，「わたくしは昨日，彼女に会った」という意味のフランス語は“Je l’ai vu hier.”となる。そして，「わたくしはいつも，彼女に会った」という意味のフランス語は，“Je la voyais souvent.”となる。フランス語では「vu」と「voyais」とに区別される過去形が，日本語では「会った」一語で括られいる。

ひるがえって，意味関係論におけるコトバの意味を理解するため，図表 1 を参照したい。たとえば，ある一定の範囲に内属する四足の動物群を認識し，彼・彼女らに名前（コトバ）を付与するケースを考えてみよう。ある言語社会（Ⅰ）では，それら動物に対し，「狼」「犬」「野犬」「山犬」という 4 語で識別しているものと仮定する。他方，それとは別の言語社会（Ⅰ’）では，同一の動物群に対し，「犬」「野犬」「山犬」という 3 語で識別しているものと仮定する。

言語社会（Ⅰ’）においては，言語社会（Ⅰ）における「狼」に相当する語が欠落している。日本語や韓国語で区別される『蝶』と『蛾』が，フランス語では「papillon」一語で括られているケースにてらしても，言語社会（Ⅰ’）において言語社会（Ⅰ）における「狼」に相当する語が欠落している

図表１　コトバの意味は関係である



と仮定する議論は，けっして非現実的ではない。

また，言語社会（I’）において，言語社会（Ｉ）における「狼」に相当する語が欠落していることについて，次のような誤解は強く回避されなければならない。たとえば，「狼」という語のない言語社会（I’）においては，言語社会（Ｉ）において『狼』だと人びとが認識していた動物に対し，言語社会（I’）では「山犬」または「犬」または「野犬」という語のいずれかによりそのまま丸ごと含意されることになるであろう，という誤解である。

図表１は，よくよく慎重に読み取られねばならない。たとえば，「狼」という語のない言語社会（I’）では，言語社会（Ｉ）において「狼」と呼ばれていた動物が，すべて「山犬」という語に含まれると即断されてはならない。凝視して分かることであるが，「山犬」・「犬」・「野犬」という諸語の意味空間（価値）が，「Ｉ」と「I’」とではそれぞれすべて変化しているからである。

意味関係論においては，あるコトバ（記号）の意味は，他のもろもろのコトバ（記号）の意味との〈差異〉（difference）でしかない。図表１におけ

るⅠについて言えば，左側の，「狼」という語のある社会においては，「狼」は何らかの自存的な実体（動物）を意味するのではない。「狼」とは，「犬」でもなく，「山犬」でもなく，「野犬」でもない動物の謂である。「犬」とは，「狼」でもなく，「山犬」でもなく，「野犬」でもない動物の謂である。また，「山犬」とは，「狼」でもなく，「犬」でもなく，「野犬」でもない動物の謂である。そして，「野犬」とは，「狼」でもなく，「犬」でもなく，「山犬」でもない動物の謂なのである。

言語社会（Ⅰ）におけるコトバの意味と，言語社会（Ⅰ'）におけるコトバの意味との，意味におけるこうした相互のズレは，それぞれの言語社会におけるコトバが体系（system）をなすからである。たとえば，日本語は日本語独自の体系をなしており，フランス語はフランス語独自の体系をなしている。体系の違いのために，たとえば，「蝶」という日本語の単語と「papillon」というフランス語の単語は，意味が相互に異なってくるのである。後者は『蛾』をも含意するのに，前者はそうでない。体系としてのコトバはそれぞれに，そのコトバを母語とする人びとの知覚・認識・行動をそれぞれ構造的に拘束し，誘導する。

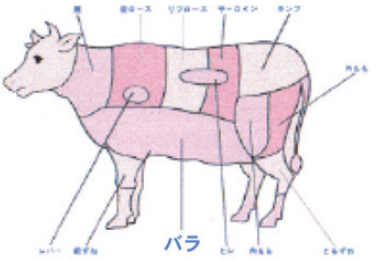
上の類似例は，牛肉部位に対する区分について日韓比較した場合にも見られる。図表２のとおりである。両者において，もっとも顕著な相違は，牛肉腹部の部位区分である。韓国人は「カルビ」（갈비）と「腹身」（양지）を画然と区分するのに，日本人は双方とも「バラ」で総称している。

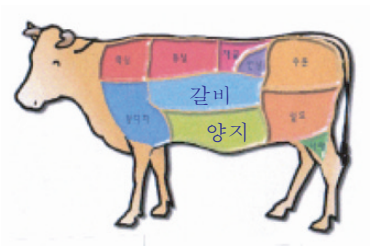
体系としてのコトバ（言語）における単語の意味は，同一言語体系内の他のあらゆる単語との関係により画定される。「蝶」にせよ「papillon」にせよ，単語はどれも客観的な対象（実体）を意味していない。単語の意味は，いずれも実体ではなく，他の単語との関係から生じるイメージなのである。イメージであるから，意味はもともと実体である必要がない。

じっさい，「お化け」，「河童（かっぱ）」，「神」，「一角獣」（unicorn），「竜」（dragon）等々といった単語の対象（実体）は，どこにも実在しない。外界に対象（実体）を有しないが，それら単語を聞いておののく人びとは多い。

図表２　牛肉部位区分の日韓比較

（和牛の部位の名前）　　（韓牛の部位の名前）





つまり，人間の心をゆさぶり，突き動かすのは，コトバの対象（実体）ではなく意味（イメージ）なのである。日本人をこわがらせるのは実体としての『お化け』ではなく，「お化け」というコトバの意味（イメージ）なのである。ひっきょう，意味なるものは，コトバの〈内〉にあって，コトバの〈外〉にはない，ということになる。

Ⅲ　コトバと認識

存在するから見えるという人たちがいる。実在論者という。逆に，見えるから存在するという人たちがいる。観念論者という。ソシュールは，そのいずれでもない。彼によれば，人間はコトバを頼りに外界を知覚するとされる。人間はコトバがあるから，何かあるものが見えるという。言い換えれば，コトバを知らなければ，人間には何も見えないと主張する。コトバがすべてなのである。ここから，ソシュールは「唯言論者」と呼ばれている。

実在論・観念論・唯言論とは，存在論（ontology）の分岐である。これら３者存在論を言語観とクロスオーバーさせて再整理するならば，前２者は意味実体論，最後者は意味関係論と再分類されうる。複数ある言語外存在に対して，前２者はそれらを原子論的存在と見立てる考え方であり，最後者はそれらを全体論的存在と見立てる考え方である。

コトバの意味（実体）をオリジナル，コトバをコピーとするならば，実在論も観念論も，内容的には共に「反映論」（写像論）と規定せられうる。実在論は，観念が存在（オリジナル）をコピー（反映ないし写像）しているとなす見方である。観念論は，逆に，観念の方をオリジナルとし存在の方をコピー（反映ないし写像）となす見方である。実在論も観念論も，暗黙のうちにオリジナルとコピーは「一対一で対応」するものと前提されている。

3者存在論の中では，実在論を信じる者が圧倒的多数である。実在論が現世の常識である。この見方に立つ人びとによれば，観念論など論外であろう。また，唯言論も受け入れがたいことであろう。コトバなどあろうとなかろうと，コトバには関係なく，外界に存在するものは存在する。そう見えるからである。

コトバがなければ，外界を知覚できないなんて，そんな馬鹿なことがあるだろうか。実在論者は皆そう思う。しかし，そうした存在論（存在観）は錯覚にすぎない。ソシュールによるこの指摘は，日本における梅津レポートによっても正当性が裏打ちされている。当該レポートは，つとに1952年に発表されている[8)]。

たとえば，生まれながら目の見えない，いわゆる先天盲の人たちがいる。それらの人びとも，成長してから開眼手術に成功すると，目は見えるようになる。そんな彼らにとって，最初に見える外界とは，一体どんな光景であろうか。

梅津八三によれば，次のとおりである。

⑴　開眼手術直後は，ただ，まぶしいだけ。外界に対しては何も識別できない。だが，

⑵　外界に対する「明暗」，「色調」の識別は比較的容易に習得する。しかし，

⑶　事物の「形態」，「遠近」の識別は習得が非常に困難である。

8）鳥居修晃・望月登志子，『視知覚の形成Ⅰ』，培風館，1992年，25ページ。

梅津はきびしく警告している。「開眼後の初期の段階――の特徴をわきまえずに，形を目じるしとしなければならないような弁別訓練を強行すると，開眼者は，進歩どころか，眼を閉じて手術前の盲人の状態に戻ってしまうことがある・・『・・やさしいところから順序をおって分化の工作を進めなければならないことを示唆するものである』」[9]。

明暗・色調・形態・遠近についての「分化の工作」とは，他の語との関係的差異としての「コトバの学習」に他ならない[10]。山内も言うように，まさに「人間の文化とは，・・・・まず言語によって世界を分化してゆくことから始まった」［傍点原文のまま；執筆者注］のである[11]。

すなわち，開眼者はまず，「○」を見せられて「マル」，「△」を見せられて「サンカク」，「□」を見せられて「シカク」というコトバを聞かされ学ぶ。こうした形態についてのコトバを，何度も何度も聞かされ学ぶ。

そして，「マル」（○）や「サンカク」（△）といった他の語との関係的差異を了解した後，すでに習い覚えている「シカク」という語の助けを得て，はじめて眼前の四角いものが四角く見えてくる。換言すれば，「マル」や「サンカク」との違いが分かっての「シカク」という語を事前に知っていなければ，四角いものも四角く見えないのである。ことほどさように，関係的差異の了解された語（コトバ）なしに，われわれはいかなる知覚もなしえないのである。

如上の⑴は，外界はもともとカオス（混沌）であることを示唆している。そして，⑵および⑶は，難易度に違いこそあれ，外界に対する知覚はコトバ（語）あってのことという，ソシュールの主張と符合する。

つまり，もともと外界はカオス（混沌）であり，カオスが外界の本然なの

9）鳥居・望月，上掲書，25ページ。
　鳥居修晃，「先天性盲人が初めて『見た』世界」，『科学朝日』，1987年７月号，25～29ページ参照。
10）言語学者の池上は，「分化」を「分節」の意味で用いている。
　池上，前掲書，８ページ。
11）山内，前掲書，135ページ。

である。このカオスとしての外界にコスモス（秩序）をもたらし，人間に事物・現象の個別的な知覚ないし認識を可能ならしめるもの，それがコトバということになる。われわれは，けっして〈肉眼〉で外界を見ているのではない。外界は，コトバの助けがあって見えているものにすぎない。

ソシュールの言うように，コトバなしにわれわれは外界を知覚できないとすれば，母語の違いにより，見えてくる外界も違ってくることになる。つまり，フランス語・英語・日本語・韓国語といった母語（コトバ）の違いにより，われわれ人間に見えてくる外界が違ってくることになる。換言すれば，外界の存在なるものも，母語が違えば，われわれに見えている通りには存在していない，ということにもなる。前述したように，たとえば，フランス人には『蝶』と『蛾』が〈同じ〉ように見えるのに，日本人や韓国人には〈別もの〉に見えることなどが，それである。

他にもある。たとえば，人間とは何か？　ここで人間を『常人』の意味で言うなら，「人間」というコトバの意味とて，実体よりもコトバの体系（関係）によって決まってくる。『人間』という実体が先在して，後から「人間」というコトバができているのではないのである。ユダヤ人や日韓の被差別民がなめた辛酸に明らかである。現時点でなら，ユダヤ人や被差別民の人びとが人間に見えない者も少ないに違いない。

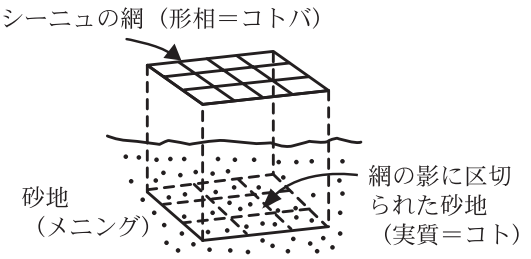
しかし，かつてはそうでない時代があった。コトバは生きものである。時代の経過とともに変化する。たとえば，同じ日本語でも，平安時代の古文は今や古語辞典なしには読めなくなった。その一事でも明らかである。

ナチス・ドイツ時代のドイツ語体系では，ユダヤ人はここで言う『人間』概念には含まれなかった。江戸時代の日本語体系では，当時の「非人」というコトバにあるように，そうした被差別民の人びとはここで言う『人間』概念には含まれなかった。もし人間に見えていたなら，彼らに対する虐殺・虐待もなかったであろう。「人間」の意味（概念）が，実体よりもコトバの体系（関係）により決まってくる好例である。

コトバとその意味との関係について，イェルムスレウはソシュールの意味

関係論を次のように読解している。図表3を参照されたい。「言語は，海辺の砂地の上にひろげられた網のようなものにもたとえられます。その網目が密であれば，砂地には細かく区切られた影が落ちるでしょうし，疎であれば，まばらに区切られた影が映ることでしょう。そして，網を取り去ってしまえば，砂地はもとのままの一面の連続体にかえってしまいます。言語の網次第で，砂地にはさまざまな模様［意味；執筆者注］が描かれるのです。」[12)]

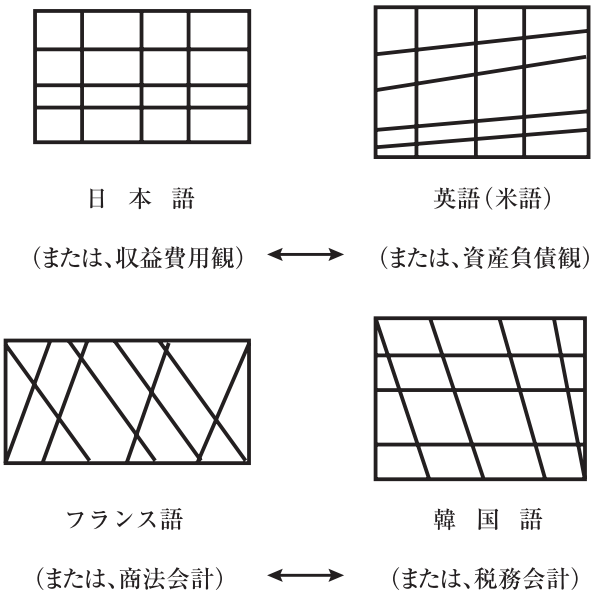
図表3　コトバ意味との関係



周知のとおり，日本語，英語，フランス語，韓国語といった日常言語は，国家・民族相互間で多様である。また，収益費用観（日本の会計基準）や資産負債観（アメリカや韓国の会計基準）といった会計言語も，地域間で多様である。イェルムスレウにならって，日常言語や会計言語における網目模様（体系性）の多様性をイメージ図で示せば，図表4のようになろう。

12）丸山圭三郎，『言葉とは何か』，夏目書房，1994年，129～130ページ。
図表3の出典は次のとおりである。
丸山圭三郎・竹田青嗣，『記号学批判／〈非在〉の根拠』，作品社，1985年，78ページ。
イェルムスレウの意が示されている原典箇所は，次のとおりである。
Louis Hjelmslev, *Prolégomènes à une théorie du langage*, trad. par Una Canger (Paris: Les editions de minuit, 1968-1971), p.75.
ルイ・イェルムスレウ（竹内孝次訳），『言語理論の確立をめぐって』，岩波書店，1985年，69ページ。
ルイス・イェルムスレウ（林栄一訳），『言語理論序説』，ゆまに書房，1998年，40ページ。

図表 4　言語（文化）の多様性イメージ



Ⅳ　連辞関係と連合関係

コトバ（語）の意味は，関係の中に置かれてはじめて生起する。ソシュールによれば，その関係には2種のものがあるとされた。連辞関係（rapport syntagmatique）と連合関係（rapport associatif）である。

ソシュールによると，連辞関係とは，ある言語表現（たとえば一つの文）に現れた単語など個々の要素が他の要素と対比関係に置かれて意味付けされる側面をいう。換言すれば，コトバの意味は，ひとつには顕在的な前後関係，コンテクストで決定される。卑近例で言えば，いわゆる文法（語順など）は，連辞関係を具現している。

他方，連合関係とは，その言語表現（たとえば一つの文）において選択された要素が，他の類似要素群と対立関係に置かれて意味付けされる側面をいう。換言すれば，コトバの意味はもうひとつ，各要素と体系全体との関係で，

その場に現れる可能性を持ちながらも，常に顕在化するとはかぎらない潜在的な関係によっても決定される。卑近例で言えば，いわゆる語彙（ボキャブラリー）などは，連合関係を具現している。

重ねて言えば，連辞関係とは語と語の結合のルールを意味し，連合関係とは言語を構成する語群の中から唯一の語を選択するルールを意味する。前者は“both-and”の関係，後者は“either-or”の関係とも解説されている。西田によれば，文（センテンス）のレベルで連辞関係と連合関係の違いを示せば，次の図表5のようになるという[13]。縦の列は「連合関係」をなし，横の行はそれぞれ「連合関係」から選び出された記号単位を一定の「連辞関係」で配列したものである。

図表5　連辞関係と連合関係

(a)	私　は	教室で	本　を	読みます	（連辞関係）
(b)	あなたは	家　で	手紙を	書きます	（連辞関係）
(c)	あの人は	郵便局で	切手を	買います	（連辞関係）
	（連合関係）	（連合関係）	（連合関係）	（連合関係）	

連辞関係とは個々の記号単位（要素）が相互にかかわりあっている総体であり，各記号単位間の前後関係である。周知のように，英語の文法書では，動詞の種類によって基本文型が5つに分類されている。この図表5において連辞関係を示すセンテンスは，第3文型（S＋V＋O）に，動詞にかかる場所を表わす副詞的修飾語（第2列）がついたものである。たとえば，(a)のセンテンスは，「私は」，「教室で」，「本を」，「読みます」という記号単位に分析される。それら4つの記号単位は，まとまって一つのコンテクストを形成し，全体として一定の意味あるセンテンスとなる。

13）西田龍雄編著，『言語学を学ぶ人のために』，世界思想社，1986年，18ページ。

他方，連合関係は，記号単位を構成する記号単位群の中から各列ごとに唯一の記号単位を選択するルールであり，各記号単位は相互排除の関係にある。たとえば，図表5の主語（第1列）の場合で言うと，「私は」，「あなたは」，「あの人は」などの中から唯一の記号単位を選択する関係である。述語（第4列）の場合で言えば，「読みます」を選択すると，「書きます」，「買います」などが排除される関係である。

丸山に借りて，連辞関係と連合関係が語の意味を画定するプロセスを具体例で示そう[14]。

連辞関係について英語に具体例を求めるならば，I saw a boy. という文の中で，saw が see の過去形の動詞であることがわかるのは，I に先立たれているからこそである。もし，その前に The とか My などがくれば，saw は名詞の『のこぎり』という意味になってしまう。フランス語であれば，temps が『時間』か『気候』か，air が『空気』か『様子』かそれとも『歌』か，極端な例をあげれば，bière が『ビール』か『棺おけ』か，cousin が『いとこ』か『蚊』か等など，すべてその前後関係によってしか決められない。

次いで，連合関係について今の例を使うならば，I saw a boy. の saw の位置を占め得たであろう met, hit, loved, *etc.* という同系列要素群との関係とも言えよう。これはまた，saw という語から連想されるすべての語群でもある。文法的には saw の位置を占める資格（この場合は動詞）がなくても，その形の上の類似から paw とか law などを連想したり，『のこぎり』という saw の意味からの連想で，carpenter『大工』とか chisel『のみ』とか plane『かんな』などを想起する場合がそうである。

ソシュールによれば，人間によって発せられるコトバはすべて，連辞関係と連合関係の共働により意味をもち，はじめてコミュニケーションが可能となる。その際，連辞関係と連合関係は相互依存の関係をなす。連辞関係のな

14）丸山，前掲『言葉とは何か』，75〜77ページ。

い連合関係はなく，連合関係のない連辞関係もない。換言すれば，連辞関係あっての連合関係であり，連合関係あっての連辞関係である。

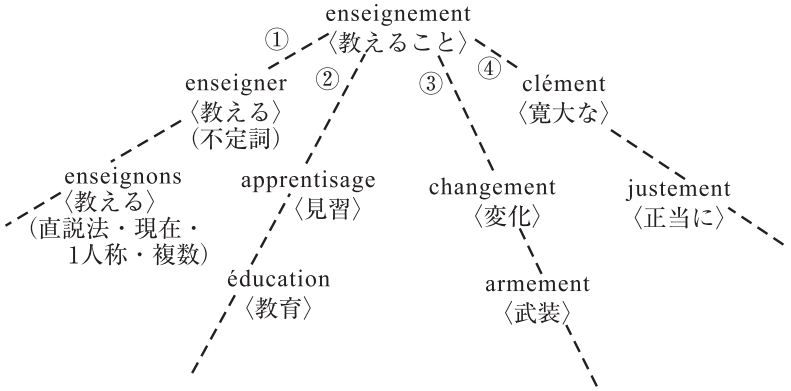
ソシュール言語学では，日本語であろうと，フランス語であろうと，エスキモー語であろうと，どのような言語体系も，こうした2つの対立する関係軸から織りなされていると考える。

連合関係の更なる理解のために，われわれは人間のコトバ（シンボル）がすべて「星座の中心」となる意義について見ておこう。ソシュールその人の説明は次のとおりである。

> 脳裡の連合によって形成された語群は，なんらか共通のものを示す諸辞項を引き寄せるにとどまらず，精神はなお個々のばあいにそれらを結ぶ関係の性質をとらえ，それによって諸種の関係と同数の連合系列をつくりだす．かくして enseignement, enseigner, enseignons, etc. のうちには，すべての辞項に共通の一要素，語幹がある；しかし enseignement という語は，もう一つの共通要素，接尾辞にもとづく系列のうちにも含まれているのが見られる（参照，enseignement, armement, changement, etc.）；連合はまた，ただ所記の類推にもとづくことも（enseignement, instruction, apprentissage, éducation, etc.），反対に，たんに聴覚映像の共通性にもとづくこともありうる（たとえば enseigne*ment* と juste*ment*）．それゆえ意味と形態との二重の共通性のこともあれば，形態か意味かただ一方の共通性のこともある．任意の語はなんどきでも，いずれかのしかたでそれに連合することのできるものをすべて呼びおこすことができる．
>
> 統合［連辞；執筆者注］というと，すぐさま継起の順序と要素の一定数とを想わせるのにたいし，連合族の諸辞項のほうは，有限数をも一定の順序をもなさずに現れる．いまもしひとが désir-eux［望ましい；執筆者注］, chaleur-eux［熱心な；執筆者注］, peur-eux［臆病な；執筆者注］, etc. を連合するとすれば，記憶の暗示する語がいくつあるか，それらがどのような順序をとって現れるかは，前もっていうことはできない．与えられた一辞項は，いわば星座の中心であり，総和の不定である他の同位辞項の収束する一点である（下の図［図表6；執筆者注］を見よ）[15].

ソシュール言語学においては，シニフィエ（signifié）とシニフィアン（signifiant）が識別される。たとえば，ひらがなで書かれた外的な「つく

図表 6　連合関係におけるイメージ（連想）の帯



え」という文字はシニフィアンである。他方，その内的な『机』という意味（イメージ）がシニフィエということになる。ソシュールによれば，シニフィエすなわち〈意味〉とシニフィアンすなわち〈形態〉（表現）は，不可分の一体として言語記号（signe）を構成すると見られている。

図表 6 に示された 4 つの系列のうち，①はシニフィアンとシニフィエの両方，②はシニフィエのみ，③はシニフィアンの一部分と機能（名詞であること），④はシニフィアンのみ，についてそれぞれ類似性があり，連想を可能ならしめている[16]。

ソシュールによれば，語彙の中のすべての語が，それぞれ連合関係における「星座の中心」になりうるとされた。そうして，それぞれの語が相互に生かし生かされ合うこと（interanimation）を強調した[17]。

「星座の中心」としての各語は，それぞれ意味の〈差異〉を通じて，系列ごとに諸語と網目をなす連合関係を形成する。同時に，各語ともすべて，そ

15）フェルディナン・ド・ソシュール（小林英夫訳），『一般言語学講義』，岩波書店，1972年，175〜176ページ。
『一般言語学講義』に示された図表のフランス語に，池上が日本語訳を付して読者の便に供している。本書では，それを図表 6 として掲げている。
池上嘉彦，『意味論』，大修館書店，1975年，279ページ。
16）池上，上掲書，279〜280ページ。
17）ピエール・ギロー（佐藤信夫訳），『意味論』，白水社，1971年，86ページ。

うした網目は単体（1枚）ではない。連合系列（連合関係における連想の帯）ごとに形成されていると見なければならない。すなわち，網目は多重的である。すなわち，相互に異なる網目が重層的に合体しているというイメージである。

どれほど多重的であるのか。ソシュールによれば，上掲引用文にあるとおり，「有限数をなさず」，「総和は不定」である。重ねて言えば，例示として図表6で提示された連合関係は4系列のみであるが，実際上はそれら4系列にとどまるものではない。宗宮が言うように，連想の帯（系列）の数（おそらく無限数）だけ多重的ないし重層的と見られなければならない[18]。

Ⅴ　言語の2大機能

私たちの住む世界，自然にあらざるものはすべて人為の所産（文化）である。それゆえ，人間社会において成立するところの経済も，文化の一つである。国際経済の発展は，交流相手国の文化に対する相互理解なしにはありえない。

意味関係論から，コトバの2大機能（働き）は以下のように分列される。

⑴　コミュニケーションの便利な手段としての機能（働き）

⑵　人間の認識・思考・行動を拘束してしまう機能（働き）

英語，日本語，韓国語，コトバが異なるがゆえに，文化が異なる。言うまでもなく，コトバがあればこそ，われわれのコミュニケーションも可能となる。かつ，コミュニケーションの手段であることが，コトバの機能のすべてである。ややもすれば，こうした認識がわれわれ周辺の一般常識であろう。

しかしながら，この一般常識は皮相な理解にすぎない。コトバのもつ威力を見損なっている。コトバにはもっと重大な働き（機能）がある。現代言語学の祖，フェルディナン・ド・ソシュール（Ferdinand de Saussure）の主張である。

18）宗宮喜代子，『ルイス・キャロルの意味論』，大修館，2001年，148～152ページ。

ソシュールによれば，コトバは私たちの認識・思考ばかりか，行動までも拘束する。簡単に言えば，コトバが違えば，見えてくる世界も違ってくると言うのである。同じ時刻，同じ場所で同じ事物をながめていても，英語を母語にする人と，韓国語を母語にする人とでは，違って見える。そう言うのである。そんな馬鹿なことがあるだろうか？

ある。たとえば，虹が 7 色に見えるのは，日本人・韓国人・中国人・フランス人。英語圏の人々は 6 色にしか見えない。ショナ語を話すジンバブエのアフリカ人には 3 色，バッサ語を話すリベリア人には 2 色。インドネシア人なら 5 色だそうである。

太陽の色もしかり。絵の具をもって画用紙に向かうとする。日本語で育てられた子供たちは「赤く」丸く描く。英語で育てられた子供たちは「黄色く」丸く描く。台湾（中華民国）の国旗名は「青天白日旗」である。すなわち，相当数の中国人は太陽を「白い」と観じているのである。

ある意味で，私たちはコトバ（母語という名の色メガネ）を用いて外の世界を見ていることになる。驚いたことに，コトバをもたなければ，何も見えないのである。われわれは肉眼で外界を見ているのではない。この点は上述した梅津レポートからも明らかであろう。

言うまでもなく，人間，色眼鏡をかけていては，見えるものの見え方にもバイアスがかかる。本来は白いものも，白いものには見えにくい。それでも，サングラス（sunglasses）のごとく，その色眼鏡が一時的にわれわれの身体の外側にかけられたものであるならば，認識上のバイアスも自覚しやすい。色眼鏡をはずせば，その種バイアスは失せる。

他方，もし言語がコミュニケーションの手段にとどまらず，われわれの認識・思考・行動を内側から拘束するものであるとすれば，どうか。言語とは，まさに成長の過程でわれわれの身体の奥深くにインストールされた「色眼鏡」と言えよう。こちらの色眼鏡（体内プログラム）は，はずそうにもはずせない。他者に存する言語体系との対比で，自身の言語体系におけるバイアスをせいぜい相対化できるのみ，バイアスそれ自体の除去ないし払拭は望みがた

い。

私たちは，既知のコトバを一つひとつあてがいながら，外界の事物を認識してきたのである。現在もそのように認識しているのである。コトバとは事物の名前にあらず，逆に，事物がコトバの産物だったというわけである。

時に，「コトバは独り歩きする」とよく言われる[19]。しかし，コトバの独り歩きは散発的な現象ではない。意味関係論によれば，コトバの独り歩きは，われわれ人間社会における常態的な現象なのである。すなわち，「コトバはいつも独り歩きする」というものである。まこと，“はじめに言葉ありき”（聖書）とは，よく言ったものである。コトバは独立変数として，いつも私たちの認識を決定づけている。

意味関係論者によれば，実在がコトバを規定するのではない。逆に，コトバが実在を規定すると言うのである。卑近例をあげよう。ストレスがたまると，日本人は『肩が凝る』。が，『ベルギー人は肩が凝らない』[20]。彼の地の母語（フランス語）に「肩が凝る」というコトバがないためである。「肩が凝る」というコトバがないので，欧米人は『肩が凝る』代りに，「背中が痛くなる」（“I have a pain on the back.”）というコトバのとおりに『背中が痛くなる』のである[21]。韓国人も日本人とは異なる。彼らは「頭の後ろが引っ張られる」（“뒷골이 당긴다.”）というコトバのとおりに，身体的にも『頭の後ろが引っ張られる』のである。コトバの実在規定性を示している。

日本人の描く太陽の色彩についても，あるいは，さまざまな異論がありえ

19）その典型例は，クラーク博士が述べた「少年よ，大志を抱け」（聖書・マタイによる福音書４章１～11節）というコトバであろう。日本基督教団翠ヶ丘教会の井殿準牧師も次のように述べている。「『少年よ，大志を抱け』（W.S.クラーク）。我々はこの後に続く言葉を知っているだろうか。この言葉は，『立身出世や名声を得るために大志を抱け』という意ではない。クラーク博士（当時，札幌農学校教頭）は，『少年よ，大志を抱け。お金のためや自分だけの立身出世や，また世に言うはかない名声のためでなく，人間としてあるべきすべてのものを達成するためにこそ大きく望みを持ちなさい』と語った。得てして，人の言葉は，前後が省かれ，独り歩きをする。」
http://www.midorigaoka.jp/preaching.cgi?id=9&page=

20）飯島英一，『ベルギー人は肩が凝らない』，創造社，2000年，174ページ。

21）内田樹，『寝ながら学べる構造主義』，理想社，2002年，70ページ。

よう。「日本人が描く太陽が赤いのは，たまたま夕陽を描いたものである」とか，「昼間，青空の下での太陽はまぶしくて色の判別はむずかしいが，白色がもっとも近いのではないか」とか，いう講釈である。しかし，この見方では，おそらく，いまだウソつくことなど知らない，日本の 4 歳児になる図表 7 のような絵画について，説得力ある説明はできないであろう。青空の下でありながら，太陽は赤く描かれているからである[22)]。

赤い色については，太陽以外にも同類の現象が存在する。リンゴに対する色のイメージの国際的多様性と，それに係わる着色行為である。一般に，日本人に存するリンゴのイメージは赤色である[23)]。しかし，フランス人にとっての一般的イメージは緑色だそうである。英語圏・ドイツ語圏・ロシア語圏では，赤色もあれば緑色もあるという[24)]。

図表 7　夕陽だけが赤いのではない

『私と友だち』

（青空の下でも赤い）

川崎駅百合ヶ丘幼児教室　江口若那（4 才）　画

22）江口若那作画，『私と友だち』から。出所は次のとおり。
http://www.shichida.ne.jp/sakuhinsyuu/kaiga2.htm
23）丸山圭三郎，『文化のフェティシズム』，勁草書房，1984年，188〜190ページ。

日本人の食するリンゴがもともと赤色のものが多いだけというなら，言語の実在規定性など問題にならない。しかし，赤い色にわざわざ〈着色〉する行為が実存するとなると，問題は別であろう。ありていに言えば，日本では，リンゴは赤くなければいけないのである。たとえば，緑色では未熟と思われて売れないからである。

じっさい，「旭」などという緑色系品種のリンゴは，わざわざ手間をかけて人工着色をしなければほとんど売れないという。「旭」の他にも，人工着色の点では，「むつ」，「ジョナゴールド」という品種も同様とのことである。９～10月ごろ，リンゴの実に紙の袋をかけておく。晴天の日にその袋を取り去り，日光に当てる。すると，リンゴは美しく赤く着色し，消費者の購買意欲をそそるという[25]。

リンゴに対するこうした人為的な着色は，会計における「粉飾決算」の営みと通底する。ただし，リンゴ農園と違って，企業経営における粉飾決算では，「赤」ではなく「黒」（黒字＝利益計上）を志向する。

コトバの意味については，もうひとつ枢要な留意事項が存在する。外示（denotation）と共示（connotation）の別である。「外示」とは，辞書に現われる字義，文字どおりの意味をいう。他方，「共示」とは，コトバにこもる他の情緒的な意味をいう。コトバはどれもみな，比重に差こそあれ，外示と共示を併有している。

たとえば，「赤」というコトバについて考えてみよう。それが「赤い色」を意味する場合は，外示としての意味になる。しかしながら，「赤」というコトバは，しばしば「共産主義者」という意味ももっている。これなどは，共示としての意味になる。

韓国慶尚道の男性が道で出会った友人に対し“문둥아”［ムンドゥンア］と呼びかけるとき，その語は微塵も「ハンセン氏病」など意味しない。それ

24）鈴木孝夫，『日本語と外国語』，岩波書店，1999年，27～31ページ。
25）この点については，2003年５月12日，加藤農園（栃木県矢板市）から懇切な説明を得た。

どころか，強い親近感を表してのことである。これなどは，共示の意味でコトバが用いられる典型的なケースである。「お前」や「貴様」といった日本語が，字義とはうらはらに対話の相手を見下して用いられるのも，同じように共示の意味での使用である。

上述のとおり，コトバは意味をもつ。そして，その意味が事物・現象の見え方を決定する。外示と共示は相互に連合関係をなし，多重的かつ重層的に渾然一体となって，われわれの知覚・認識を規定している。

Ⅵ　営業報告書の韓日米比較

かつて，李御寧（イー オリョン）教授（韓国・梨花女子大学）は，日本人の特性を「縮み志向」文化に見出した。李教授によると，アメリカ人をはじめとする西洋人や，韓国人・中国人らは，日本人とは対照的に「拡がり志向」文化に属するとした[26]。

李教授の鋭い洞察に関連して，われわれの業界において卑近例を求めよう。たとえば，営業報告書（annual reports）の大きさ（サイズ），すなわち，営業報告書の平面的大小が挙げられる。

日本の場合，株主に送られる営業報告書（ないし事業報告書）の大きさは，「幅（ヨコ）×長さ（タテ）」で示すと，定型大封筒（12㎝×23.5㎝）に収まる大きさ，10㎝×20㎝ほどのものがほとんどである。

韓国の営業報告書は，おおむねＡ４版サイズ（20.8㎝×29.5㎝）の大きさである。日本のそれより，はるかに大きい。それはほぼ，米国のアニュアル・レポートの大きさに匹敵する。

ちなみに，韓国と米国との間でも，わずかながら相違が見出される。すなわち，韓国の場合が大体Ａ４版サイズであるのに対し，米国の場合は自国に特有の標準サイズ，だいたい8.5インチ×11インチ（21.6㎝×28㎝）の大きさである。

26）이어령,『축소지향의 일본인』, 기린원, 1994년, 278페이지.

いずれにせよ，日本の縮み志向は，米国や韓国の拡がり志向と対比した3者間比較により，いっそう歴然とする。スモール・イズ・ビューティフルあるいはスモール・イズ・グレイト，日本人は「小さいこと」（シニフィアン＝形態）に『大きな価値』（シニフィエ＝意味）を見出す。

韓国における株式会社の誕生は，「大日本帝国」植民地下のことであった。日本の国策会社・東洋拓殖株式会社（1908年設立）はその嚆矢（こうし）である。すなわち，韓国では近代の株式会社制度は日本から導入された。しかし，第二次大戦独立後，営業報告書のサイズは，日本の頭越しに，太平洋の向こう側の米国に倣（なら）った。李御寧説からすれば，韓国におけるそうした帰趨は，なんら不思議でも何でもないということになろう。韓国は米国とともに，同じ拡がり志向文化に共属するからである。

営業報告書の大小だけではない。他の至る所でも，縮み志向と拡がり志向の対立が見られる。たとえば，教科書をはじめとする本のサイズ，街中を走る自動車の大きさなどがあげられる。日本と韓国・米国とでは，それらサイズの「標準」に，違いの厳存することが見てとれる。日韓関係で言えば，韓国では日本よりも米国で出版される書物の大きさに近いものが多い。全体自動車数に対する軽自動車数の割合も，韓国では米国と同様，日本国内と比べてはるかに小さい。

意味関係論からは，コトバ・文化はすべて〈集団幻想〉[27]である。ともに幻想であるから，各国・各民族間で相異するコトバ・文化に優劣はない。「韓国語（文化）は日本語（文化）よりも優れている」とか，「韓国語（文化）は英語（アメリカ文化）よりも劣っている」とか考えるのは正しくない。各国・各民族のコトバ（文化）はすべて同等である。

27）本稿に言う「集団幻想」を，丸山は「共同幻想」というタームを用いて解説している。ただ，「共同幻想」と言えども，普遍的な幻想ではない。英語，フランス語，日本語，韓国語など，諸言語間で相互に異なる幻想である。この点で，われわれは敢えて，「集団幻想」とした。
丸山の「共同幻想」については，次稿を参照されたい。
丸山圭三郎，「文化という記号」，『書斎の窓』，有斐閣，第344号，1985年5月号，20ページ。

しかし，だからといって，各国・各民族間で相異する文化を比較検討してみる必要などないとするのも，間違っている。孫子の兵法にも，「敵を知り己を知れば百戦殆うからず」と言うではないか。ビジネスで勝利を収めるためには，相手国の企業文化をしっかり理解しておく必要がある。

さて，〈会社〉はいったい「誰のもの」なのか？　用いられるコトバをベースに，企業文化の日米韓比較を試みよう。会社（company）にかかる〈人称代名詞所有格〉（コトバ）から察知しうる。

米国の場合，それは営業報告書の第１ページ（冒頭）に明らかである。経営者（会長ないし社長）から株主への「ごあいさつ」がそれである。米国の経営者は株主に対し，「your company ‥‥」（あなたの会社では）と説明する。すなわち，米国では，「会社は株主のもの」なのである。

日本では，自社のことを「我が社（my company）では‥‥」と言う。この場合，「my」というのは，外示よりも共示の意味にウェートをかけて用いられる。文字どおり，外示の意味での「私の」ではなく，共示の意味での「会社との一体感」が含意されている。日本語で言う「私の」の意味は，外示的には英語で言う「my」の意味よりも「our」の意味に近い。すなわち，サラリーマン社長も従業員も，日本人は滑稽なまでに企業と一体感をもつ。

外国からバイヤーを迎える。応対に出た，ただの新入ヒラ社員がブロークン・イングリッシュ（直訳）で「my company（ウチの会社は）‥‥」などと，のたまう。それを聞いた相手は，こんな若者が巨万のオーナー経営者なのかと，ビックリ仰天する。この種の笑い話は，今もたえない。すなわち，日本では，「会社は会社のもの」なのである。

日本企業の幹部が，スキャンダル発覚により逮捕される。その姿が，ＴＶや新聞に大写しとなる。毎度のごとく，ノー・ネクタイでパトカーに連行される。検察によるネクタイ押収は，機密露見防止のため，幹部らが自殺する恐れあってのことと聞く。そのような話，アメリカ人や韓国人にはアンビリーバブルであろう。

アメリカや韓国でも，スキャンダル発覚でトップ（経営者）が自殺するこ

とはある。たとえば，韓国の現代グループ会長・鄭夢憲氏の自殺（2003年8月）などがあげられよう。しかし，日本ではトップ（最高責任者）は死なない。その下の中間管理者らが「会社のために」自殺するのである。第二次世界大戦で日本はアメリカに負けた。しかし，最高責任者である昭和天皇は死ななかった。これなども，すぐれて日本的現象と言えよう[28]。

韓国では，自社のことを「우리사［ウリサ］（our company）에서는［エソヌン］••••」（われわれの会社では）と言う。「われわれ」というコトバを用いるからとて，この場合も外示の意味で理解してはならない。かりに『民主的』だなどと取ると，とんでもない誤解である。韓国語も，「公主様」「王子様」「両班」「令監」等など，いつも字義どおりの意味で用いられるであろうか。それと同類の話である。

ソシュールによれば，既述のとおり，コトバの意味は何よりも他のコトバの意味との差異（différence）により決定される。韓国語の「ウリ」（우리）の意味は，比重で言えば，そのコトバともっとも尖鋭に対立するコトバ，すなわち「ナム」（남）の意味との差異により決定される部分がもっとも大きい[29]。

このことと相まって，韓国語では，「ウリ（われわれ）」という人称代名詞には，『同族の中での序列の存在』が含意されている。韓国では，家父長制文化が日本よりもはるかに濃厚である。家族の中ではアボジ（お父さん）がもっとも偉いのである。何でも，彼の思いのままである。「家族」を「会社」

28）昭和天皇が戦争責任をとらず死なずにすんだのは，連合国最高司令官・マッカーサーの判断による。ただ，マッカーサーのそうした判断も，昭和天皇の戦争責任を問わない方が，戦後の日本を占領統治するのに有効と見られたためだとされている。結局は，日本の文化が作用してのことだったのである。終戦の前年（1944年），下掲訳書の原本が米国で出版された。一般に，マッカーサーの判断は本書の内容によると見られている。
ルース・ベネディクト（長谷川松治訳），『定訳・菊と刀』，社会思想社，1967年，27〜44ページ参照。
http://nichiju.lin.go.jp/mag/05306/06_07.htm

29）金文学は言う。「『ウリ』は何よりも『ウリ』ではない異質の『他人［ナム；執筆者注］』との差異を強調する排他的な言葉である。」

に置き換えて言えば，会社はトップのもの，つまり，「会社は経営者のもの」なのである。

それゆえ，韓国の場合，大企業（財閥）のトップでさえ，日本人のように企業を〈社会的存在〉だとか〈公器〉だなどとする発想はない。自社の後継者は，自身の息子でなければならない。企業だけではない。いまだ国家に対してさえも，その公共性は忘却されがちである。北朝鮮における政権世襲に思いをいたせば，読者にも理解が容易であろう。

Ⅶ　む　す　び

以上の小考につき，われわれなりの結論を要約して示せば，次のとおりである。

⑴　会計は「企業の言語」と言われる。日本人が日本語でコミュニケートするように，アメリカ人が英語でコミュニケートするように，ビジネスマンは会計によりコミュニケートしていると見られる。会計が言語であるとは，ビジネスマンの間で会計言語の〈意味〉が共有されているからである。たとえば，仕訳（センテンス）の意味が，複式簿記（企業の言語の文法）に通じたビジネスマンの間で周知されているからである。

⑵　意味関係論によれば，実在がコトバを規定するのではなく，コトバが実在を規定する。コトバは実在の名前でもなければ，写像でもない。日本では，「リンゴ」は『赤色』でなければならない。リンゴ農園では，緑色では売れないので，わざわざ赤く着色する。こうした人為的な操作は，企業会計における〈粉飾決算〉の営みと通底する。ただし，粉飾決算では，赤字ではなく黒字（＝利益計上）を志向する。

金文学・金明学，『国民に告ぐ！―在日韓国系中国人兄弟による痛哭の祖国批判』，祥伝社，1999年，102～103ページ，108ページ。
中村も言っている。「『ウリ』は中に向かっては団結を強めるが，外に向かっては排除を強めるのである。」
中村欽哉，『韓国人が身勝手にみえる理由―ウリの求心力と排他性』，三交社，1996年，214～215ページ。

⑶　李御寧教授による日本人の「縮み志向」，韓国人・アメリカ人の「拡がり志向」は，３国における営業報告書（ないし事業報告書）のサイズにも現れている。日本では，「幅（ヨコ）×長さ（タテ）」で示すと，定型大封筒（12㎝×23.5㎝）に収まる大きさ，10㎝×20㎝ほどのものがほとんどである。韓国やアメリカの場合，おおむねＡ４版サイズ（20.8㎝×29.5㎝）の大きさである。日本のそれより，はるかに大きい。

⑷　会社は誰のものか？　ビジネスマンの間で交わされるコトバ，とりわけ会社（company）にかかる〈人称代名詞所有格〉に明らかである。コトバなくして知覚・認識なし。さらに，コトバの意味として，外示のみならず共示までカバーして言うなれば，アメリカでは，会社は株主のものである。日本では，会社は会社のものである。韓国では，会社は経営者のものである。

（CHUN Jae Moon／経営学部教授／2007年１月６日受理）
（CHOI Jin Hyun／韓国・慶尚大学校経営大学教授／2007年１月６日受理）

読者諸賢へのお願い：

本拙稿に対するご感想・ご叱正を下記のメール・アドレスまたはファックス番号あてお寄せいただけましたら、深く感謝いたします。　（全 在 紋）

E-mail　：　chun@andrew.ac.jp
Fax　　：　:0721-65-6309